

ジャーナリズム論 I

科目ナンバリング SOC-107
選択 2単位

木下 浩一

1. 授業の概要(ねらい)

古典的分類において、ジャーナリストは「送り手」であり、読者や視聴者は「受け手」です。ジャーナリズム活動は受け手の存在を前提としています。しかしながらそのコミュニケーションの主体は、少なくともコンテンツ(新聞記事など)に関しては、送り手であるジャーナリストです。ジャーナリズムの実践とは、どのようなものなのか。ジャーナリズムという実践は、われわれにどのような影響を及ぼすのか。ともに考えましょう。

本講では一部、ペアワークなどを行います。他の参加者とも意見や考えを共有しましょう。

2. 授業の到達目標

- 1) 世の中で起きていることに興味を持ち、一般読者としてだけでなく、アカデミックな視点からニュースを見ることができる。
- 2) ジャーナリズムの在り方について、批判的な見方ができる。

3. 成績評価の方法および基準

中間試験(50%)と期末試験(50%)を総合して評価する。

4. 教科書・参考文献

教科書

*教科書は特に指定しない。

参考文献

石澤靖治 『テキスト現代ジャーナリズム論』 ミネルヴァ書房、2008年

大石裕・藤田真文・岩田温 『現代ニュース論』 有斐閣、2000年

津田正太郎 『メディアは社会を変えるのか:メディア社会論入門』 世界思想社、2016年

5. 準備学修の内容

▼授業では新聞記事を多用します。新聞記事や授業の内容から、1)興味関心を広げる、2)関心を絞り込む、3)特定の事例について調べる、4)再び受講する。1)から4)を繰り返し、2回の試験に臨んでください。リアクションペーパーやペアワークについても同様です。

▼アクチュアルな時事問題を積極的に取り入れていきます(例:京都アニメーション放火殺人事件、「教師間いじめ問題」)。そのため、シラバス上の授業内容と相前後する場合があります。

6. その他履修上の注意事項

▼後期に「ジャーナリズム論Ⅱ」を履修することが望ましい。

▼学びは「やる気」がすべてです。「興味」から出発し「深める」、このすべての過程に、やる気は欠かせません。コツは「楽しむ」こと。楽しむことができれば、自ずとやる気がわき、継続できます。ただし、ここでいう「楽しみ」は、遊びのそれとは違います。大学ならではの知的な楽しみを共有しましょう。

7. 授業内容

- 【第1回】 ガイダンスとイントロダクション:ジャーナリズムによって構築されるリアリティ
- 【第2回】 現在のジャーナリズムの状況①:オールドメディア
- 【第3回】 現在のジャーナリズムの状況②:ニューメディア
- 【第4回】 現在のジャーナリズムの状況③:インターネット・ニュース(Digital Journalism)
- 【第5回】 ジャーナリズムの歴史①
- 【第6回】 ジャーナリズムの歴史②
- 【第7回】 質疑応答とペアワーク
- 【第8回】 中間試験
- 【第9回】 中間試験のフィードバック
- 【第10回】 ニュースの生成過程:新聞を事例に
- 【第11回】 さまざまなバイアスの存在:不偏不党とは
- 【第12回】 ニュースの娯楽化:テレビを事例に
- 【第13回】 フレーミング:どのように語るか
- 【第14回】 質疑応答とペアワーク
- 【第15回】 まとめと期末試験